

「柏崎の橋」

27 おりはし 折橋

折橋は、主要地方道鯨波・宮川線が鶴川を横断する橋である新道地内に架かっている。

この橋は、『白川風土記』に「鶴川ニ架ス板橋ナリ長サ十六間幅二間」と記されている。また「往還筋ノ橋ナレハ材木費用皆領主ヨリ給シ人夫縄ノ類鯖石上條ノ組合ニテ出ス」とあるように、行き来が多く、主要な道に架かる橋であったため、新道村にある橋だったため、工事の人夫や縄などの消耗品は、新道村ではなく鯖石・上条の組合が負担していたことがわかる。

柏崎の名所を歌い上げる三階節にも折橋は登場する。『柏崎文庫』に「新道折橋柳ばし 春日ア 春日の梭橋 大堰かけるが涙橋」、松田政秀氏収集の三階節に「新道折橋柳橋、町の、大橋蟋蟀茨目街道のどうどばし」「新道折橋柳橋、田尻、田尻の鉦橋大堰かけるが涙橋」とみえる。



現在の折橋

この橋の架替工事と弘法大師にまつわる伝説が『柏崎市伝説集』に2つ記されている。一つは、弘法大師が工事をしていた若者達に橋を渡らせて欲しいと頼んだが断られ、引き返して行くと、橋のたもとにあった胡桃が石のように固くなった、という石胡桃の話。もう一つは折橋の名の由来の話である。工事をしていた村人に弘法大師が渡らせて欲しいと頼んだが、断られたうへ「お前が渡るとこの橋は折れるぞ」と悪態をつかれた。橋は大師が渡り終えた途端に真ん中から折れた。それで折橋と言うようになった、というものである。

なお、名の由来には、鷲尾の観音様にお参りする人はこの橋で馬やかごを降り、そこから徒歩になったので「おり橋」だとする説もあり、『柏崎文庫』には「折橋（下り橋）」という表記も見える。旧道が折れ曲がっているところに架かる橋なので付いた名なのではないか、という説も残る。

橋のたもとにあったという伝説の石胡桃は、『柏崎文庫』に、周囲が七尺位で梢まで八間位、と書かれているように実在したものと思われる。また、昭和7年度の『高田村村勢一斑』では、二十数年前に枯れてなくなったものの、枯木の一端を鶴川神社と高田尋常高等小学校標本室に保存していると書かれている。

現在の橋は昭和47年3月に完成したものであり、現在は、6月半ばまで耐震補強と補修が行われている。これからも伝説と共に橋は後世に残っていくことだろう。

●参考にした本

- 「白川風土記」(224 ヒロ) 広瀬典著
- 「柏崎の民俗第2号」(382 Kミン) 柏崎民俗の会編
- 「柏崎市伝説集」(388 Kキヨ) 柏崎市教育委員会編
- 「新集柏崎三階節」(916 マツ) 松田政秀著
- 「高田村村勢一斑」(352 カリ) 高田村役場
- 「柏崎文庫」16巻(080 セキ) 関甲子次郎著